TUDA SOUKICHI

# 津田 左右吉

写真：東京都武蔵野市境の自宅の書斎にて

## 名誉市民 津田左右吉博士

津田左右吉は、美濃加茂市下米田町の出身です。左右吉は学問研究に一生を捧げ、学問への情熱を貫き通した立派な学者です。文献に基づく科学的な方法で、日本だけではなく、中国や朝鮮の地理・歴史の研究に大きな足跡を残しました。

戦後、左右吉は学問の向上に貢献したとして第８回文化勲章を受章しました。また、郷土の誇りとして美濃加茂市名誉市民に推挙され、長年の功績を称えられました。

## 少年時代

左右吉は、４歳の時父から四書の素読（そどく）を習い、その要点を暗唱するまでになっていました。明治19年、文明小学校を卒業し、この年の秋、名古屋に出て、英語と数学の私塾で学びました。同21年、大谷派普通学校（現名古屋大谷高校）へ入学しましたが、向学心に燃えた左右吉は在学１年弱で中退し、東京専門学校（現早稲田大学）の校外生となり、その講義録を読みはじめました。17歳で東京専門学校邦語政治科２年の編入試験に合格し、その翌年には優秀な成績で卒業しました。第８回得業証書授与式で優等賞状と賞品（大隈重信夫人授与）を受けました。

津田左右吉の生家

## 父　藤馬

父藤馬（とうま）は、幕末に参勤交代で江戸詰10ヶ年の任についており、中央での新しい知識や情報を身につけていました。

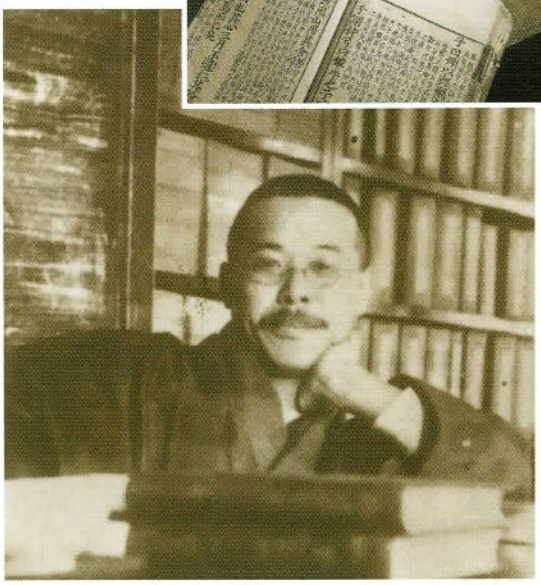
明治５年、学制発布により当地に開設された文明小学校で教鞭を取り、左右吉も同じ学校で学びました。

## 母　勢以

母勢以（せい）は教育に理解があり、２人の妹も進学のため上京させています。名古屋や犬山の有名な呉服商の仕立てをした腕前で、裁縫による手内職によって学資をつくっていました。「津田様のお針子に」という程の評判を呼び、近郷近在の娘たちが裁縫を習いに大勢集まりました。

下米田町信友にある母勢以のお墓には、東京の左右吉の家にあった、クチナシの木が傍らに移植してあります。

四書



早稲田大学教授時代　大正 10 年１月

## 森達先生

文明小学校（現下米田小学校）での左右吉は、森達（とおる）先生（号好斉）に目を掛けられ、授業の他に余課として漢籍の講義を受けました。

左右吉は子どもの頃を思い出し、「『日本外史』は面白かった。森先生に習った人物の逸話や詩、歌はいつまでも忘れずにいてことごとしい言い方をするとそれが後の私の生活の基調の一つとなった…。」と述べています。

## 津ね夫人

高等女子実修学校卒業後、津ね夫人は左右吉と結婚しました。

左右吉の膨大な専門書の草稿を浄書して、原稿に仕上げるのはいつも夫人でした。『津田左右吉全集』の編集の時、二人の筆跡が余りにもよく似ていて、見分けがつかないほどでした。

## 白鳥庫吉博士

明治28年から、東京大学の白鳥庫吉（くらきち）博士（東洋史学者、東洋文庫の主宰者）に左右吉は師事しました。あるとき、白鳥博士に歴史教科書の編集依頼があり、左右吉が執筆することになりました。白鳥博士の期待に応え、『新撰西洋史』を完成させました。

明治41年、白鳥博士主宰の満鮮歴史地理調査室が麻布の満鉄東京支社内に設立されると、左右吉はその研究員となり、念願の歴史研究に専念することになりました。

東洋文庫にて　昭和８年２月

## 津田事件

早稲田大学や東京大学での講義や、自身の研究に明け暮れていた左右吉に、思いがけない事件がふりかかってきたのは、昭和15年の春でした。極端な国粋主義者の原理日本社は、左右吉の研究に危機感を抱き、左右吉を告発しました。『古事記及び日本書紀の研究』を手始めに、全４冊が発禁処分等となり、左右吉は追い込まれていきました。

昭和17年５月、左右吉・岩波の両氏に、出版法第26条違反「皇室の尊厳を冒涜（ぼうとく）した」という理由で、

有罪の判決が下されました。裁判所の一審判決は、左右吉に禁固３ケ月、出版元の岩波茂雄氏に禁固２ケ月（ともに２年の執行猶予）というものでした。その後、検事側、左右吉・岩波両氏ともに控訴を申し立てました。

しかし、控訴審が一度も開かれないまま１年余りが経過し、昭和19年11月、「時効完成により免訴」の宣告が東京控訴院で行なわれ、この事件はあっけない幕切れに終わりました。

## 戦後の栄光と晩年

昭和20年６月、日増しに激化したＢ29の空爆をさけて、左右吉は岩手県平泉村に疎開しました。戦後、第５代早稲田大学総長、歴史学研究会長、文部省歴史科専門委員等の要職に就任要請をされましたが、研究に専念したいという理由で、左右吉はいずれも辞退しました。

左右吉はそれまでの学問的業績が認められ、同24年11月、文化勲章を受章、同26年７月、第１回文化功労者に選ばれました。同35年10月、早稲田大学において米寿の祝賀会がおこなわれ、今後の活躍を期待されました。しかし、翌年の12月４日に惜しまれながらこの世を去りました。享年88歳でした。

## 郷土とのつながり

昭和23年２月、母の見舞いに帰郷した折り、地元の有志らと懇談しました。その時、「先生はこんな田舎の出身で、どうやって勉強したのですか」という質問がありました。左右吉は「今すぐには答えられませんが、帰ってから考えてみましょう」といって、この場は帰りました。その後、『思ひ出すまゝ』を出版し、この質問に対しての答えとしたのです。

後に故尾関公見下米田小学校長の熱意で、左右吉の業績をたたえる機運が盛り上がりました。昭和35年、左右吉は美濃加茂市名誉市民に推挙表彰されることになりました。５月、太田小学校の講堂で名誉市民の推戴式が行われました。また、母校の下米田小学校で記念講演会、生家の訪問、父母の墓参りなど、久しぶりの郷土で楽しい時を過ごしました。

## 津田文庫と津田賞

左右吉は「子どもたちのために」といって、自分の著書や図書を下米田小・中学校に贈り続けました。これが、下米田小学校の「津田文庫」です。左右吉の没後、津ね夫人は下米田小学校に多額の寄付金を送られました。同学校はこの厚志で卒業生に文鎮を作り、「津田賞」として贈りました。現在は、津田顕彰会がこの事業を引き継いでいます。

## 津田左右吉博士顕彰会活動

地元の有志によって、昭和59年２月に「津田左右吉博士顕彰会」が発足しました。この会では、「津田左右吉賞少年の作文募集」（毎年）、生家脇に「津田左右吉博士生誕之地」記念碑建立、市立中央図書館前に「知の積層」記念碑建立、下米田小学校に「津田博士胸像」建立など、博士の顕彰活動を行なっています。

津田夫妻　武蔵野市境

下米田小学校訪問
昭和 35 年５月

下米田小学校
津田文庫

下米田小学校
校庭前の胸像

## 津田左右吉博士略年譜

| | |
|---|---|
| 明治6年(1873) | 10月3日、岐阜県加茂郡栃井村（現美濃加茂市下米田町東栃井）に津田藤馬の長男として生まれる。 |
| 明治12年(1879) 6歳 | 文明小学校（現下米田小学校）に入学。森達校長より大きな感化をうける。 |
| 明治19年(1886) 13歳 | 文明小学校を卒業。名古屋の私塾に学ぶ。 |
| 明治23年(1890) 17歳 | 東京専門学校（現早稲田大学）邦語政治科2年に編入。 |
| 明治24年(1891) 18歳 | 東京専門学校を優等で卒業。 |
| 明治28年(1895) 22歳 | 白鳥庫吉の指導のもと、西洋歴史教科書を執筆。 |
| 明治29年(1896) 23歳 | 中等教員免許状をとり、群馬県尋常中学校助教諭として前橋へ赴任。以後千葉中、独逸協会中学校に勤める。 |
| 明治32年(1899) 26歳 | 父藤馬死去（57才、東栃井墓地）。 |
| 明治39年(1906) 33歳 | 高橋吕長の次女、津ねと結婚。 |
| 明治41年(1908) 35歳 | 白鳥庫吉主宰の満鮮歴史地理調査室の研究員となる。 |
| 大正2年(1913) 40歳 | 『神代史の新しい研究』『朝鮮歴史地理』を刊行。 |
| 大正5年(1916) 43歳 | 坪内逍遙の「序」を付して、『文学に現はれたる我が国民思想の研究－貴族文学の時代－』刊行。 |
| 大正7年(1918) 45歳 | 早稲田大学講師（大正9年教授、以後昭和15年まで）。 |
| 大正8年(1919) 46歳 | 『古事記及び日本書紀の新研究』刊行。 |
| 大正11年(1922) 49歳 | 「上代支那人の宗教思想」により文学博士となる。 |
| 大正12年(1923) 50歳 | 「東洋史会」を結成。 |
| 昭和5年(1930) 57歳 | 『日本上代史研究』刊行。 |
| 昭和9年(1934) 61歳 | 早稲田大学東洋思想研究室設立。 |
| 昭和15年(1940) 67歳 | 早稲田大学教授を辞任。『古事記及び日本書紀の研究』『神代史の研究』『日本上代史研究』『上代日本の社会及び思想』が発売禁止の処分となり、左右吉及び岩波茂雄は出版法違反で起訴される。 |
| 昭和19年(1944) 71歳 | 控訴審は時効により、免訴。 |
| 昭和20年(1945) 72歳 | 戦火をさけて岩手県平泉に疎開。昭和25年まで在住。 |
| 昭和21年(1946) 73歳 | 第5代早稲田大学総長に選ばれたが固辞。早稲田大学名誉教授になる。 |
| 昭和22年(1947) 74歳 | 帝国学士院会員になる。 |
| 昭和24年(1949) 76歳 | 第8回文化勲章受章。 |
| 昭和26年(1951) 78歳 | 第1回文化功労者に選ばれる。 |
| 昭和35年(1960) 87歳 | 3月、美濃加茂市名誉市民に推挙される。5月、その推戴式に臨席し、あわせて先祖への墓参、母校下米田小学校訪問、児童に講話。10月、早稲田大学小野講堂で、米寿の祝賀式が行われる。 |
| 昭和36年(1961) 88歳 | 朝日賞受賞。『思想・文芸・日本語』刊行。12月4日、武蔵野市境の自宅で死去。8日、従三位勲一等を贈られる。11日、大隈講堂において準大学葬「津田左右吉先生葬送の儀」執行。 |
| 没　後 | |
| 昭和37年(1962) | 埼玉県新座市野火止の平林寺に埋葬される。 |
| 昭和38年(1963) | 『津田左右吉全集』全33巻発行（岩波書店）。昭和41年完結。 |
| 昭和55年(1980) | 津ね夫人、94歳で死去。 |
| 昭和59年(1984) | 津田左右吉博士顕彰会設立。 |
| 昭和62年(1987) | 記念碑「知の積層」を市立中央図書館前に建立。『津田左右吉全集』全33巻の再版と補巻2冊の発行（岩波書店）。 |
| 昭和63年(1988) | 武蔵野市境の自宅が武蔵野市津田公園として整備される。 |
| 平成2年(1990) | 群馬県北軽井沢に歌碑建立。 |
| 平成4年(1992) | 下米田小学校に「津田博士胸像」完成。胸像建立記念誌『津田左右吉博士』の発行。 |
| 平成5年(1993) | 早稲田大学旧図書館内に「津田左右吉博士記念室」開設。 |
| 平成7年(1995) | 『マンガで読む郷土の偉人伝　津田左右吉物語』発行。 |
| 平成10年(1998) | 『歴史学者 津田左右吉』発行（赤座憲久著・小峰書店）。 |
| 平成13年(2001) | 「津田左右吉博士記念館」完成。 |

## 津田左右吉博士記念館

津田左右吉生家は、明治初期に建てられた民家です。左右吉の父藤馬が明治維新後に移住し、左右吉が生まれた頃に下米田町東栃井に建てられたものです。

建物は、桁行き9間、梁行き4間半で、当初は茅葺き入母屋造りでした。大正時代に他家へ譲渡されることになりましたが、大きな改築などもなく戦後に至ることになりました。しかし、昭和34年の伊勢湾台風による被害を受けてしまい、それ以降断続的に改築が加えられていくこととなります。

近年、生家を移築させ、復元する計画が美濃加茂市によって進められ、その解体・移築工事が、平成10～12年度にかけて行われました。

名称を「津田左右吉博士記念館」とし、平成13年3月に完成しました。記念館には、津田博士を紹介するコーナーが設置され、左右吉の生き方に学びつつ、地域文化の向上や文化交流の場としての活用が期待されています。

【名　　称】 津田左右吉博士記念館

【場　　所】 岐阜県美濃加茂市下米田町西脇1471番地の1

【開館時間】 9時から16時30分

【休 館 日】 月曜日および月曜日が祝祭日の場合は火曜日、年末年始
（平日の場合には、下米田連絡所へ連絡のこと）

【入 館 料】 無　料

【お問い合わせ】 みのかも文化の森　TEL 0574－28－1110

発行／津田左右吉博士顕彰会・美濃加茂市
事務局／〒505-0004 岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1 文化の森内
tel 0574-28-1110 fax 0574-28-1104 みのかも文化の森HP. http://forest.minokamo.gifu.jp